

にて、珍肴をそなへたるふるまひなどのあるときの言なり、出羽の方言をいふ諺に、

あいべちや、こいちや、ござもせちや、

あいべは行けといふこと、こいは來れといふこと、ござもせはござれといふ方言なり、ちやは助語にて、かの國にてつねにいふこと、ぞ、盛岡あたりの方言をいふ諺に、

びる、どんばがにげいる、

蛭蜻蛉蟹、慕なり、陸奥の俗は濁音多ければなり、また筑紫がたにては、詞の末にばつてんといふ助語を、そへていふことあり、聞きなれぬものは、耳にかゝりてをかしきやうに思へど、今常にさういうたればとて、しかりかなりといふこと、誰もいふことにて、ばとてといふ詞の國のなまりにて、ばつてんとなるなり、すべて國によりて品物の名の異なるは、さもあるべきことなれど、詞の轉訛は大かた音便よりくづれて、終には詞のものとわからぬこと多かり、

〔皇都午睡 三編 上〕江戸は日本國の人の寄場にて、言葉も關八州の田舎在郷の訛をよせて、自然となりし物ゆるゑ、江戸詞と云ては甚少なし、其内古風を守り、叮嚀の詞も有り、大體京攝の詞を詰て短かく云ならはせし也、京都にても上京と下京と少し宛の詞に變あり、大坂にても五畿内の寄詞にて、三郷に大同小異あり、安治川邊の者は、四國九州中國の詞に馴れ、上町玉造の者は、大和伊賀伊勢の詞に移り、堺の者は、紀州和泉路の詞に通じ、天滿の者は、丹波丹後の言葉も交るべし、遠國他境の人の開語のはかり兼るは、各生れ所の國言葉にて訛とはいふべからず、諸國の人を相人とする都會の者が、其國詞に付合て云を訛と云也、笑ふべきことにはあらず、凡三都の者ほど訛るものはなし、心を付て聞べし、

京と大坂と一夜の船の隔あるにさへ、大坂の温ぬひは京で暖あたひ、京のきついは、大坂のゑらい、大坂の大きい京でいつかい、大坂でどゑらひは、京で仰山、大坂のそふじやさかひは、京でそじやけん